

総 説

「ライフヒストリー」概念に関する文献検討
—終末期在宅がん療養者の家族介護者への活用—

**A Review of Literature of Life History
Practical use of Concept to
The Families Who Caring for Terminal Cancer Persons at Home**

山 村 江美子 (Emiko Yamamura)* 長 戸 和 子 (Kazuko Nagato)**

要 約

本稿の目的は、ライフヒストリーの構成概念を明らかにし、自宅で看取りを行う終末期在宅がん療養者の家族介護者への看護実践や研究への適用が有用かを検討することである。45件の論文と、7冊の書籍を対象として、ライフヒストリーの概念に関する記述の部分を抜粋して、構成している要素を抽出した。構成概念として、【経験】と【意味付け】が抽出された。【経験】には、＜転機となる出来事＞＜相互作用＞＜自己形成＞という構成要素が含まれており、【意味づけ】には、＜表現＞＜意味の生成＞が含まれていた。ライフヒストリーとは、人生における経験を表現し、意味づけられたものであると考えられた。

自宅で看取りを行い、家族と死別に至るという体験をする終末期在宅がん療養者の家族介護者に対して、ライフヒストリーは有用な概念であると考えられた。

キーワード：ライフヒストリー Life History 概念分析 終末期在宅がん療養者 家族介護者

I. は じ め に

ライフヒストリーの意味は多義的である¹⁾と言われている。1つには研究の方法論として確立されているライフヒストリー法であり、一方では日本語訳として示されている「生活史」「人生史」という個人の人生や生活における歴史という捉え方がある。

ライフヒストリー法は、20世紀の初めに、文化人類学の分野において、アメリカ先住民の研究から始まった²⁾。アメリカ先住民の文化が急速に消えつつある中²⁾、自伝という形で最初のライフヒストリーが収集³⁾された。その後社会学において、トーマスとズナニエツキの『生活史の社会学—ヨーロッパとアメリカのポーランド農民』により、ライフヒストリーは正当な研究手法として確立し³⁾、社会調査の歴史の中で、手紙や生活史を本格的に使用した初めての調査⁴⁾となった。この時期、シカゴ学派が都市研

究の一環としてライフヒストリーを頻繁に用いて、後にシンボリック相互作用論という理論的枠組みの伏線になった⁵⁾とされているが、ブルーマーは当初、個人的ドキュメントは著しく科学的価値を欠くもの⁴⁾⁶⁾と論評していた経緯がある。1940年代後半になると実証主義の傾向が強まり、抽象的な理論化が求められるようになった⁵⁾。これにより、ライフヒストリー研究は一時的に衰退したが、社会学の流れが、客観性から主観性へと移行⁷⁾するに伴い、1980年代以降から、ライフヒストリーの研究はさまざまな学問領域の方法論として見直されることになった。しかし現在においても、一般化の困難性⁸⁾、ライフヒストリーとライフストーリーの相違曖昧性⁸⁾など、未だ研究方法としての論議が展開されている。

我が国の看護学分野においては、田中氏が、地域で生活する精神障がい・当事者のライフヒストリーを構成し、病いの意味を理解する論

*聖隷クリストファー大学看護学部

**高知県立大学看護学部

文^{9~12)}を発表した。これは、対象者の自発的な語りが尊重されまとめられた内容であり、発症前の人生も含めた人を深く理解するものであった。また、松田氏らは、血液疾患を発症して以降の患者というライフヒストリーに焦点をあて、病いを克服する過程を記述^{13~14)}した。北村氏¹⁵⁾は、2名の対象者のライフヒストリーを構成し共通した部分を抽出し、病いの意味が創り出される過程にある構成要素と構造を明らかにするという分析法を用いた。ライフヒストリー構成の時期、分析の方法は、研究者によってさまざまであるが、対象者の生活史を再構築し、そこから経験の意味を解釈し、看護への示唆を得る試みは同様であった。

我が国は現在、住み慣れた自宅等、患者が望む場所での看取り推進に向けて、在宅医療体制の見直しを続けている。自宅におけるがん死亡率¹⁶⁾は、2005年の5.7%以降、2013年には9.6%と緩やかな微増傾向を続けている。訪問看護師等のサポートを受けながら、自宅で療養者を看取る家族介護者は、死別を前にして家族の歴史を振り返ることが明らかにされている^{17~19)}。看護の実践場面において、部分的ではあっても療養者や家族介護者がライフヒストリーを語ることはよくあることであろう。しかしながら、方法論としてのライフヒストリー法は、長い歴史をもち学際的にも有効な方法論として活用されているが、生活史・人生史としてのライフヒストリーを構成している概念を明らかにしている論文は少なく、研究方法としてのライフヒストリーと区別なく使用されている状況でもある。また、ライフストーリー、ライフコース、ナラティブなど類似概念も多いなか、定義が明確化されていない状況にある。

以上のことより、生活史・人生史としてのライフヒストリーを構成している概念を検討することは、対象者が語るライフヒストリーをよりよく理解し、根拠ある看護実践への示唆を得ることにつながると考えた。そこで本稿では、ライフヒストリーの構成概念を明らかにし、終末期在宅がん療養者の家族介護者への看護実践や研究への適用が有用かを検討することを目的とした。

II. 文献検討の方法

個人が捉えた「生活史」「人生史」としての「ライフヒストリー」および「Life History」の構成概念を検討するために文献を検索した。国内文献については、医学中央雑誌を用いて「ライフヒストリー」をキーワードとして検索を行った。ライフヒストリーの文献は1994年以降に論文として掲載されており、66件を検索した。海外文献については、CINAHLを用いて「Life History」をキーワードとして、1981年以降に1523件の文献を検索した。

これらの文献の中から、ライフヒストリーを概念として記述している45件の論文と、7冊の書籍を分析の対象とした。

構成概念の検討方法は、ライフヒストリーおよびLife Historyの概念に関する記述の部分を抜粋し、ライフヒストリーを構成している要素を抽出した。

III. ライフヒストリーを構成する概念

個人が捉えた「生活史」「人生史」としての「ライフヒストリー」を構成する概念として、【経験】と【意味付け】が抽出された。

1. 【経験】を構成する要素

ライフヒストリーを構成する概念の【経験】には、＜転機となる出来事＞＜相互作用＞＜自己形成＞が含まれていた。

1) 転機となる出来事

＜転機となる出来事＞とは、人生において状態や状況の変化につながる出来事であった。状態や状況の変化をもたらした出来事には、疾患の発生や治療の開始¹⁴⁾²¹⁾²²⁾、病者や障がい者として生きる生活の変化²³⁾²⁴⁾、家族介護者としての役割の変化²⁵⁾、価値判断・価値基準・人生観という認識¹¹⁾²⁰⁾に変化を与えた事柄を含んでいた。

2) 相互作用

＜相互作用＞とは、家族間、そして家族以外の他者とも互いに影響しあう連続性を示し、個人が生きてきた時代や、国や地域という社会が

らも影響を受け、個人の行動が変化していくことであった。《家族の相互作用》《他者との相互作用》《時代・社会との相互作用》という要素が含まれていた。

《家族の相互作用》は、互いの気持ちや考えを言語的・非言語的に伝え影響しあう^{14)21)23~26)}という行動が示された。これは、認識の変化²¹⁾²³⁾²⁴⁾²⁶⁾、行動の変化¹⁴⁾²¹⁾²⁵⁾を家族間にもたらし、次の世代の新たな家族の役割行動へと影響²³⁾²⁶⁾を与える連続性が含まれていた。

《他者との相互作用》とは、家族以外の他者からの関わり²³⁾²⁷⁾に影響を受け、自身の関わりも他者に影響を与えることを認識²³⁾²⁷⁾し、他者のために力量を発揮する行動²³⁾²⁷⁾に移行することが示されていた。

《時代・社会との相互作用》とは、時代における国の施策は個人の生活に影響を与え²⁸⁾²⁹⁾、時代が変化して以降も個人の意識や行動に影響²⁸⁾²⁹⁾を及ぼすこと、そして時代が変化し社会が変化することは、周囲の人々の考え方や価値観に影響を与え¹⁰⁾²⁶⁾、変化した社会に対して、意思を発信し伝える¹⁰⁾²⁶⁾²⁹⁾という時代の変化の影響を受け、個人の行動が変化することが示されていた。

3) 自己形成

〈自己形成〉とは、時代の影響や個人の体験を通して、自我を形成し、自己省察に基づき自己を形成するという時間的経過を含むものであった。《自我の形成》《自己の省察》という要素が含まれていた。

《自我の形成》とは、自分を理解し受け入れるという中心的課題の達成²⁶⁾と、自己の存在意味の獲得²⁵⁾が含まれていた。自我の形成は、人生における時間的経過に関わる出来事に大きく影響を受けており、それは、戦争という長期的出来事³⁰⁾や、ジェンダーという年齢経過に伴う出来事²⁶⁾、困難³¹⁾や辛い体験²⁵⁾であった。

《自己の省察》は、自己のおかれている現状³²⁾³³⁾や、過去の体験に付随する意識²¹⁾を自ら振り返る²¹⁾³²⁾³³⁾ことである。振り返り認識されたものは自身の感情であり、折り合い²¹⁾、受容・意欲・希望³²⁾、自己効力³³⁾という肯定感として認識されたものと、過去の絶望的感情¹¹⁾という否

定的側面も含まれていた。

2. 【意味付け】を構成する要素

ライフヒストリーを構成する概念の【意味付け】には、〈表現〉〈意味の生成〉が含まれていた。

1) 表現

〈表現〉とは、ある事柄について伝えるという意思をもち、言語手段による口述と、文字や画像という資料によって伝える行為である。《伝える意思》《口述》《個人的資料》という要素を含む。

《伝える意思》とは、語るという自発性¹⁰⁾²⁸⁾³⁴⁾と主体性²⁸⁾³⁴⁾、それに加えて、伝える内容を選択化²³⁾²⁴⁾²⁹⁾³⁵⁾³⁷⁾、焦点化²³⁾²⁴⁾²⁹⁾³⁶⁾するという意思を含むことが示された。

《口述》とは、具体的な言葉³⁰⁾を用いて、語るという言語行為²⁸⁾³⁰⁾³¹⁾³⁸⁾である。過去の記憶を想起³⁷⁾し、今ここ³⁷⁾という現在性³⁴⁾へと言語化することである。

《個人的資料》とは、手記、綴り方、手紙、写真、映像記録、所持品などの生活記録³⁹⁾⁴⁰⁾⁴¹⁾であり、これらは、当事者の独特な意味が込められたもの⁴²⁾であった。

2) 意味の生成

〈意味の生成〉とは、話し手と聞き手による対話的な相互行為によって、話し手自身が意味を見だし、話し手と聞き手がその意味を共有し、話し手と聞き手の解釈によって、共同で意味を作り出すことである。《対話的相互行為》と《意味の導出》が含まれていた。

《対話的相互行為》¹⁰⁾⁴⁶⁾とは、語り手と聞き手という存在の認識⁴³⁾、ラポールという関係性⁴⁴⁾、何についてという準備性⁴³⁾をもち、発話行為と聴取行為が往復⁴³⁾されることである。

《意味の導出》とは、話し手が自分の人生を解釈して表現²¹⁾⁴⁷⁾し、話し手自身がその解釈に意味を見だし⁹⁾¹²⁾²⁵⁾⁴³⁾、話し手と聞き手という両者によって意味が共有^{43)~45)}されることが示された。これは、話し手と聞き手の両者の関心による解釈という共同作業⁴³⁾によって作り出されることであった。

IV. 関 連 概 念

ライフストーリーの関連概念として、「ライフストーリー」「ナラティヴ」「ライフコース」があげられる。

ライフストーリーとは、以前においては、ライフストーリーを構成する、口述の素材として捉えられていた経緯⁴⁷⁾がある。その後においては、やまだ氏は、ライフストーリーは人生の物語⁴⁷⁾であり、物語とは、「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」としている。つまり、ライフストーリーとは、その人が生きている経験を意味づける行為であり、生成・変化のプロセスであると述べている。生成・変化とは、物語を語り直すことによって、過去の出来事を再構成することができるというように、語りはたえずつくられ組み替えられる行為としている。語られるライフストーリーは、日常的に語られた話から、フィクションとしての物語、歴史につながる文化的意味も含む幅が広いものであった。

桜井氏⁴⁸⁾は、ライフストーリーは、個人が歩んできた自分の人生について個人の語るストーリーであり、人生に意味があると思っていることを選択的に語っているものとしている。ストーリーが、事実であるのか想像上の事柄なのかは問題としていないこと、話し手と語り手の言語的相互行為によって語られ、自己や現実が構築されるとしている。また、ライフストーリーの上位概念をライフストーリーと示しており、ライフストーリーのみでライフストーリー全体を構成する場合もあるとしている。

ナラティヴ⁴⁷⁾とは、物語る行為であり、ストーリーより形式的な語りであり、想像力に富むというより事実描写の物語とされている。また、ライフストーリーよりも、語る行為に重点が置かれている。

ライフストーリーは、過去の記憶を想起するにあたって、忘却による曖昧性を含む現在による過去の意味づけ⁴⁹⁾ではあるが、語りによって物語を書き換え再構成することや、想像上の事柄という概念は含まれておらず、語る行為への重点も示されていないところにライフストーリーやナラティヴとの相違があるように考えられる。

ライフコース⁵⁰⁾とは、社会文化的要因によって形成された個人がたどる一生の道筋である。下位概念として、軌道と移行が示されている。軌道とは、長期的な観点による出来事や状態の移り変わりや積み重ねであり、移行とは、変化を示す概念である。社会文化的要因として、社会構造という年齢別役割、他者との相互作用、人間行為力という個人の能力や信念、歴史的出来事や時代背景を含む。人間の発達過程と、歴史的な出来事が及ぼす発達過程の影響に着目していることが特徴⁵¹⁾であり、ライフストーリーに包含される下位概念であると考えられた。

V. ライフストーリーの概念とその活用

1. ライフストーリーの概念

ライフストーリーには、〈転機となる出来事〉〈相互作用〉〈自己形成〉という【経験】と、〈表現〉〈意味の生成〉からなる【意味づけ】という構成概念が含まれていた。ライフストーリーとは、人生における個人の経験を表現し、意味づけたものとして考えることができる。

2. 終末期在宅がん療養者の家族介護者への活用

終末期在宅がん療養者の家族介護者は、療養者を自宅で介護していく中で、家族と療養者との関係性に家族の歴史があることを再発見していた¹⁷⁾。また、終末期在宅がん療養者と主介護者にもたらされるEnrichmentのプロセスにおいても、病気になる以前から培ってきた歴史、患者と家族の関係性を築く人生の長い時間、価値や意味をもった相互交流を毎日同じように繰り返してきた出来事¹⁸⁾が見出されている。そして、終末期在宅がん療養者と家族は、残された日々の中で歴史を振り返り、家族員を失った後にも家族として存在していた証を礎に生きていけるように関係性を築いていた¹⁹⁾。

ライフストーリーの構成概念には、〈転機となる出来事〉が示されており、それは人生において状態や状況の変化につながる出来事であった。自宅で看取りを行う家族介護者という役割や生活の変化、家族との死別に至るといった体験は、人生において状況の変化につながる大きな出来事であろう。家族介護者が、自宅で看取り

を行う【経験】や、病気になる以前からの【経験】を想起表現し、対話を通しての【意味づけ】を看護職が支援することは、自宅での看取りを行うことに対する自己肯定感や意欲の維持、死別を前にして家族としての存在意味を認識することへとつながるであろう。自宅での看取り体制を構築するにあたっては、訪問看護師という<他者との相互作用>が考えられ、看取りの経験という家族介護者のライフヒストリーに、看護職が大きく関わっていくことが考えられた。

また、ライフヒストリー概念を看護研究に活用することは、家族介護者にとって自宅での看取りに至る経験がどのようなものであり、その経験をどのように捉え、どのように意味づけ、何を看護職に伝えようとしているのかを明らかにすることにつながり、ライフヒストリーを傾聴するという看護実践に対して、意図をもって看護実践に臨むという根拠を提示することにつながると考えられた。このことより、終末期在宅がん療養者の家族介護者に対して、ライフヒストリー概念は、有用であると考えられた。

VI. お わ り に

ライフヒストリーには、経験と意味づけという構成概念が示された。経験には、転機となる出来事、家族・他者・時代や社会との相互作用、自己の形成という構成要素が含まれ、意味づけには、表現、意味の生成という構成要素が含まれていた。ライフヒストリーとは、人生における個人の経験を表現し、意味づけたものであると考えられた。

終末期在宅がん療養者を看取る家族介護者は、死別を前にして家族の歴史を振り返る^{17~19)}。しかし、振り返る内容は明らかにされていない。おそらくそこには、家族介護者の個人としてのライフヒストリーが含まれていると考えるが、自宅で看取りを行うにあたって、何を意図してライフヒストリーを語り伝えようとしているのか、その根拠を明らかにし、看護実践に活かすために、ライフヒストリー概念は有用であると考えた。

<引用・参考文献>

- 1) 谷 富夫：新版ライフヒストリーを学ぶ人のために、4、世界思想社、2008.
- 2) L. L. Langness, Gelya Frank ; Lives an anthropological approach to biography, 1981./ 米山俊直、小林多寿子：ライフヒストリー研究入門 伝記への人類学的アプローチ、22、ミネルヴァ書房、1993.
- 3) Ivor Goodson and Patricia Sikes ; Life History Research in Education Settings, 2001./高井良健一・山田浩之・藤井 泰・白松 賢：ライフヒストリーの教育学、1-2、昭和堂、2006.
- 4) 中野正大・宝月 誠：シカゴ学派の社会学、22、世界思想社、2009.
- 5) 中野 卓・桜井 厚(編)：ライフヒストリーの社会学、7、弘文堂、1995.
- 6) Herbert Blumer ; Symbolic Interactionism Perspective and Method, 1969/後藤将之：シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法、152、勁草書房、2003.
- 7) Ivor Goodson and Patricia Sikes ; Life History Research in Education Settings, 2001./高井良健一・山田浩之・藤井 泰・白松 賢：ライフヒストリーの教育学、13、昭和堂、2006.
- 8) 有末 賢：生活史宣言 ライフヒストリーの社会学、124-130、慶應義塾大学出版会、2012.
- 9) 田中美恵子：ある精神障がい・当事者にとっての病いの意味 地域生活を送るNさんのライフヒストリーとその解釈、看護研究、33(1)、37-59、2000.
- 10) 田中美恵子：ある精神障害・当事者にとっての病いの意味 Sさんのライフヒストリーとその解釈 ステイグマからの自己奪還と語り、聖路加看護学誌、4(1)、1-20、2000.
- 11) 田中美恵子：ある精神障害・当事者のライフヒストリーとその解釈(第1部) 地域生活を可能とした要因および個人における歴史と病いとの関係、東京女子医科大学看護学部紀要、5、1-15、2002.
- 12) 田中美恵子：ある精神障害・当事者のライフヒストリーとその解釈(第2部) 病いの意味：自立と自己の存在の意味を求めての

- 闘い、東京女子医科大学看護学部紀要、5、17-26、2002.
- 13) 松田光信、羽山由美子：同種骨髄移植を受けた女性の体験世界に関する記述的研究、日本精神保健看護学会誌、13(1)、1-13、2004.
 - 14) 松田光信、八木弥生：末梢血幹細胞移植を受けたAさんのライフストーリー 新生自己の創出、日本看護科学会誌、26(1)、13-22、2006.
 - 15) 北村育子：病いの中に意味が創り出されていく過程 精神障害・当事者の語りを通して、構成要素とその構造を明らかにする、日本精神保健看護学会誌、13(1)、34-44、2004.
 - 16) 厚生労働省：平成25年人口動態調査、上巻死亡 第5. 21表 死亡の場所別にみた主な死因の性・年次別死亡数及び百分率.
 - 17) 小林裕美：在宅ターミナル療養者を看取る家族の思いと訪問看護師の支援 主介護者側から見た視点で、日本赤十字九州国際看護大学紀要、3、77-90、2005.
 - 18) 石本万里子：終末期がん患者を在宅で介護する家族にもたらされたEnrichment、日本がん看護学会誌、23(1)、31-43、2009.
 - 19) 山手美和：在宅で生活する終末期がん患者と家族の“家族の絆”、日本がん看護学会誌、24(1)、44-51、2010.
 - 20) 辻 京子、大西美智子：思春期に中途視覚障害となったA氏のエンパワメントの軌跡、日本保健福祉学会誌、18(2)、29-37、2012.
 - 21) 中込さと子、横尾京子、田口智子：体外受精-胚移植によって子どもが得られなかった女性のライフストーリー研究、日本生殖看護学会誌、6(1)、4-16、2009.
 - 22) 西村美穂、大森美津子：子宮がんの治療を受けた既婚女性の体験に伴う感情に関する研究、香川大学看護学雑誌、13(1)、25-32、2009.
 - 23) 橋本卓也：全身性障害者のセルフ・エンパワメントの生成要因と自立生活過程における課題 頸髄損傷者のライフストーリーに焦点をあてて、生活科学研究誌 人間福祉分野、7、1-12、2008.
 - 24) 松村ちづか：ある在宅痴呆性老人家族介護者の自己強化のプロセスと他者との関わりの意味 Hさんの介護体験の半ライフストーリー的分析、順天堂医療短期大学紀要、13、31-40、2002.
 - 25) 篠原好江：性同一性障害（GID）をもつ人の看護への提言 ライフストーリー・インタビューによるGID の人の軌跡より、GID（性同一性障害）学会雑誌、4(1)、82-85、2012.
 - 26) 石橋通江：境界例治療経験をもつ成人のライフストーリー 退院から20年経過した体験のふり返り、日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report、(8)、15-22、2010.
 - 27) 渡部鏡子、大石洋一：ある精神障害者にとっての病の意味、神奈川県立保健福祉大学誌、1(3)、105-112、2006.
 - 28) 野並葉子、米田昭子、田中和子、山川真理子：2型糖尿病成人男性患者の病気の体験、兵庫県立大学看護学部紀要、12、53-64、2005.
 - 29) 佐藤みゆき、下平唯子：元ハンセン病患者のライフストーリー研究 歌に託された喪失と許し、東京保健科学学会誌、6(2)、128-136、2003.
 - 30) 古城幸子、木下香織、馬本智恵：看護初学者の高齢者理解を深める教育方法の試みKJ法を活用した「祖父母のライフストーリーの語りを聴く」課題からの学び、インターナショナル Nursing Care Research、11(1)、99-105、2012.
 - 31) 秋山 智、中村美佐、加藤匡宏：地域生活を送る脊髄小脳変性症A氏の病気への対処行動に関する研究、ライフストーリー法による分析を通して、日本難病看護学会誌、8(2)、124-133、2003.
 - 32) 加来慎也：特別支援学校教師の自立活動指導の専門性向上過程に関する一考察、淑徳大学大学院研究紀要、(18)、77-95、2011.
 - 33) 杉谷佐久良：看護師のライフストーリーから見るコンピテンシーの獲得過程、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録、29、2004.
 - 34) 中野 卓・桜井 厚(編)：ライフストーリーの社会学、24-25、弘文堂、1995.
 - 35) 古城幸子：専門教育を受けた高齢女性のラ

- イフヒストリー—生活構造分析を用いて—、新見公立短期大学紀要、24、131-137、2003.
- 36) 小林弘基、坂井由香、沖田一彦：患者—医療者間における“病態解釈の違い”について、理学療法臨床と研究、(19)、2010.
- 37) 有末 賢：生活史宣言 ライフヒストリーの社会学、139、慶應義塾大学出版会、2012.
- 38) 鈴木真理子：他分野参入の女性ソーシャルワーカーのキャリアとライフコース、埼玉県立大学紀要、10、25-41、2008.
- 39) 谷 富夫：新版ライフヒストリーを学ぶ人のために、5、世界思想社、2008.
- 40) Uwe Flick; QUALITATIVE FORSCHUNG 1995./ 小田博志、山本則子、春日常、宮地尚子：質的研究入門 人間科学のための方法論、401-402、春秋社、2002.
- 41) 辻口喜代隆、太田久美：胃切除希望を続ける男性摂食障害患者とのライフヒストリー再構築の試み、日本精神科看護学会誌、50(1)、204-207、2007.
- 42) 桜井厚、小林多寿子：ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門、154、せりか書房、2009.
- 43) 有末 賢：生活史宣言 ライフヒストリーの社会学、211-216、慶應義塾大学出版会、2012.
- 44) 桜井厚：インタビューの社会学 ライフストーリーの聞きかた、29-31、せりか書房、2011.
- 45) 中野 卓・桜井 厚 (編)：ライフヒストリーの社会学、46-53、弘文堂、1995.
- 46) 江口重幸：病いの経験とライフヒストリー・再考 精神科コンサルテーションにおける末期患者の聞き取りから (II)、精神医学研究所業績集、33、97-107. 1996.
- 47) やまだようこ編著：人生を物語る 生成のライフヒストリー、1-20、ミネルヴァ書房、2014.
- 48) 桜井厚：インタビューの社会学 ライフストーリーの聞きかた、60-62、せりか書房、2011.
- 49) 有末 賢：生活史宣言 ライフヒストリーの社会学、179-186、慶應義塾大学出版会、2012.
- 50) 安藤由美：現代社会におけるライフコース、21-27、放送大学教育振興会、2003.
- 51) 中野加奈子：生活史研究の系譜 記述と分析をめぐる課題、佛教大学大学院 社会福祉学研究科篇、(39)、17-34、2011.
- 52) 大川一郎、田中真理、佃志津子、大島由之、Lin Shuzhen、成本 迅、・佐藤真一：レビー小体型認知症高齢者の介護抵抗への対応に関する実証的検討、高齢者のケアと行動科学、16、64-81、2011.
- 53) 江口重幸：病いの経験とライフヒストリー・再考 精神科コンサルテーションにおける末期患者の聞き取りから (II)、精神医学研究所業績集、33、97-107. 1996.
- 54) 小木曾加奈子、安藤邑恵：看護学生における高齢者理解 ライフヒストリーのインタビューを基にした内容分析、教育医学、55(3)、283-292、2010.
- 55) Agnes Noble, Colin Jones: Benefits of narrative therapy: holistic interventions at the end of life, British journal of nursing: the fortnightly journal promoting excellence in nursing, 14(6), 330-333, 2005.
- 56) 秋坂真史、山本文枝、鈴木成治、平塚正伸、小牧斎：我が国在住の最長寿者における心身医学的研究(1)、心身医学、49(2)、153-159、2009.
- 57) 秋山 智、中村美佐、加藤匡宏：地域生活を送る脊髄小脳変性症A氏の病気への対処行動に関する研究、ライフヒストリー法による分析を通して、日本難病看護学会誌、8(2)、124-133、2003.
- 58) Allison A. McLeod: Resisting Invitations Depression: A Narrative Approach to Family Nursing, Journal of Family nursing, 3(4), 394-406, 1997.
- 59) Elisabeth Kubler-Ross: On Death and Dying, 1969, 鈴木晶、死ぬ瞬間 死とその過程について、中公文庫、2001.
- 60) James Gillies & Robert A. Neimeyer: Loss, Grief, and the Search for Significance: Toward a Model of Meaning Reconstruction in Bereavement, Journal of Constructivist Psychology, 19(1), 31-65, 2006.
- 61) Lorraine Hedtke, John Winslade: Remembering Lives Conversations with the Dying and the Bereaved, 2004. / 小森康永、

石井千賀子、奥野光、人生のリ・メンバリング 死にゆく人と遺される人との会話、金剛出版、2005.

- 62) Margareta Brannstorom, Inger Ekman, Kurt Boman, Gunilla Strandberg : Being a close relative of a person with severe, chronic heart failure in palliative advanced home care. a comfort but also a strain, Scandinavian journal of caring sciences, 21(3), 338-344, 2007.
- 63) Nancy J. Moules : Grief. An Invitation to Inertia : A narrative Approach to Working

With Grief, Journal of Family Nursing, 3(4), 378-393, 1997.

- 64) Robert A. Neimeya : Meaning Reconstruction and the Experience of Loss, 2001, 富田拓郎、菊池安希子、喪失と悲嘆の心理療法構成主義から見た意味の探究、金剛出版、2007/2011.
- 65) Sarah Johnson : Hope in terminal illness : an evolutionary concept analysis, International Journal of Palliative Nursing, 13(9), 451-459, 2007.